

LEADERS NOW!

21世紀の奴隷制= 人身売買を追究

「海外へ行って“困ること”がいいのです」

●留学生(チェコ出身) 文学部総合人文学科4年次生
スザナ・レンカ・ハニバロバさん

1カ月ぐらいの滞在予定でチェコから日本へ旅行に来た女子学生が、日本語を習得し、関西大学文学部で4年間学ぶことになった。この3月に卒業するスザナ・レンカ・ハニバロバさんは、今宮戎神社(大阪市)の十日戎の福娘も務めた。卒業論文のテーマである女性や子どもの人身売買の問題を、大学院でさらに追究し、将来は支援する組織をつくりたいという。

「2005年に初めて日本に来たとき、京都のお寺や茶道などの日本文化に引かれました。多くの方に親切にいただいたのに、日本語がひと言も話せないのが残念でした。温泉に行き一緒にいるおばあちゃんから声をかけられたときは、日本語を勉強したいと強く思いました」

スザナ・レンカ・ハニバロバさんはチェコに戻り、再び大阪に来て日本語学校に入った。そして、2007年4月に関西大学文学部に入学。今宮戎神社の福娘になったことは、文化財が好きなハニバロバさんにはうれしい経験だった。「沖縄のきれいな海と明るい人々も、印象に残っています」

ハニバロバさんは東南アジア諸国への旅もしてきた。カンボジア、ベトナム、インドネシアなどで、女性や子どもの人身売買が大きな社会問題であることを知り、それが卒業論文のテーマになった。チェコにいたときから、アフリカからヨーロッパへ、東から西に女性が流れてくる現実に関心があったという。

「卒業論文では、自由とは何かということから始めて、21世紀の現代でも奴隷制が存在していること、なかでも“セックススレイバリー(性的奴隷)”の人身売買に焦点を当てました。麻薬や武器の売買は一度の利益で終わりですが、人身売買は女性と子どもの労働力を使っているの、何度も利益が入ります。急成長している“陰のグローバルビジネス”なのです。発展途上国のカンボジアでは、子どもの売春宿が大きな問題になっています。先進国の日本でも、中国や韓国、東南アジアとの間での人身売買が問題になっています」

ハニバロバさんは、4月から国立大学の大学院で研究を続ける。さらに将来は、被害を受けた女性と子どもを支援する国際協力団体をつくりたいという。



スザナ・レンカ・ハニバロバ
■1983年チェコ・オストラバ生まれ。チェコ・オロモウツのPalacky大学を休学し、2005年10月から大阪市へ。ISCアカデミー、大阪文化国際学校で学び、07年4月関西大学文学部入学。4年次生。09年、今宮戎神社の十日戎の福娘に選ばれた。

「私の夢は、彼らが尊厳と安定をもって経済的に自立した生活を築き、愛と信頼、自信を再び持つこと、そして持続的に自由であり続けることです。ただし、私たちがいいと思って支援しても、彼らにとっていいかどうかはまた別です。頭の中で考えても分からないことがいっぱいあります。もっといろんなところへ行って、もっと見て、もっと感じて、もっと知りたいのです。彼らと一緒に話し合い、どうすればよいか考えていきたいと思っています」

後輩にも、海外へどんどん出ていくようにエールを送る。

「海外では言葉や文化の違いなど、いろんなことで困るのですが、“困ること”がいいのです。困って、どういうふうに対応していくかを考えることで、まず自分自身を知ることができます。少しずつ言葉を覚えて、新しい文化を学んでいけば、それが自分の勉強になります。また、外国へ行くと、自分の国のことが逆に分かってきます。私もチェコから離れたからこそ、チェコが好きになりました」



初心に返り “ドキュメンタリー映画”を監督

第1回監督作品『マジでガチなボランティア』

●メディアフォーユー株式会社 代表取締役社長
里田 剛さん 一経済学部 1994年卒業

2010年12月に渋谷(東京都)の映画館で公開されたドキュメンタリー映画

『マジでガチなボランティア』は、里田剛さんの初監督作品。

テレビの人気番組のディレクターを務め、報道番組を担当してきた里田さんは、映像制作会社を経営しつつ、今後はドキュメンタリー作品も送り出していきたいという。映像とのつきあいは関西大学の学生時代に始まった。



里田さんは関西大学第一高等学校の卒業間際に、一人で韓国を旅行した。その経験が大学時代のライフスタイルを決定づけた。

「電車の中で『私は日本人が嫌いだ、豊臣秀吉が嫌いだ』と言われた。国籍によって嫌われることに衝撃を受けましたが、逆に親切にもらったりもして、すごく新鮮だったのです」

里田さんはアルバイトをして、休暇には海外へ出掛けた。アメリカ横断、シルクロード、東南アジア、ヨーロッパ、イスラエル、エジプト…。「自分の経験を何か形にしたいとずっと思っていました」

故 石田浩教授の中国経済のゼミで、中国の農村のフィールドワークを行った際、里田さんはビデオカメラを回した。「それを編集して石田先生にお渡しすると、写真や話だけでは伝わりにくいことが、映像を見せるとすぐに理解してもらえたと喜んでいただきました」

いつかNHKスペシャルのような番組を作りたいと思っていた。しかし、テレビ制作会社に入社してみると、バラエティ番組全盛の時代。ディレクターとしてかかわった「開運なんでも鑑定団」など、何百万人もの人が見ているという手応えがあり、夢中になって作るようになった。

TBSの「サンデージャポン」でコーナー担当のフリーディレクターになってからは、事件現場に行きレポートする役も務めた。しかし、里田さんの中では、放送の限られた枠内では大事な部分や本質が伝えられないというジレンマが深く大きくなっ



里田 剛—さとだ つよし
■1970(昭和45)年、奈良県生まれ。94年関西大学経済学部卒業、株式会社ネクサスに入社。テレビ東京「開運なんでも鑑定団」など約10番組のディレクターを務める。98年からフリーランスとして活動し、TBS「サンデージャポン」などを担当。2006年メディアフォーユー株式会社を設立。会社紹介映像などの制作とともにドキュメンタリー映画も手がける。

ていったという。結局、テレビを辞めて、約1年半後に映像制作会社を設立した。

「営業をしたことがなく、自分にできることは映像を作ることだけ。本や雑誌で見て面白いと思った会社を訪ねて行って『取材させてください』と、突撃制作みたいなこともしました(笑)』監督デビュー作となった『マジでガチなボランティア』は、合コンとナンパに明け暮れていた大学生がボランティア活動が続いて、カンボジアに小学校と診療所を建てるまでの3年間を描いている。

「撮り始めたときは、映画にする意図など全くなかったのです。劇場公開映画にしようと思ってからが地獄でしたね。もともと映画用に撮っていない、撮り逃した素材もいっぱいある。病院が完成すると分かったのはかなり後で、話がどこに転ぶか分からない。夜中の12時ぐらいまで普通の仕事をこなし、それから映画の編集を始めるのですが、明け方になると眠くて頭が回らなくなり、床にごろりと寝て、また朝が来る。すごく鍛えられましたね、ハハハハハ」



「何かに本気で取り組んだ人だけが知る、歓喜と絶望を描いた」というが、それは里田さん自身のことでもあった。また、初心を思い起こす過程でもあったようだ。里田さんは今後、1年に1本、10年に10本のドキュメンタリー映画を作りつづけるつもりだ。